

建築実務演習

日 時：2006年10月4日（水） 13:00～14:30

会 場：1133 教室

講 師：今宮 優子氏（インテリアデザイナー、今宮優子デザイン室）

《プロフィール》

- 東京都板橋区生まれ
- 東京都立工芸高等学校室内工芸科卒
- ICS COLLEGE OF ARTS 本科卒
- ICS COLLEGE OF ARTS 研究科卒
- 黒川紀章建築・都市設計事務所インテリアデザイン室勤務

《仕事内容》

- （株）ヤマギワ ショールームインテリアコーディネーター
- テレビ西日本 スタジオ‘84、’85暮らしのカルチャー担当
- I.F.I（Interior From Institute・東京）住宅設備 講師
- RKB毎日放送「ハウスコム」用途別部屋のポイント担当
- ベスト電器 PR 誌「ベストナウ」 SCENE 連載記事
- 福岡県地域づくり特定課題の支援方策に関する研究委員会共通委員
- 福岡県文化懇談会委員
- 九州キヨスク（株）デザイン顧問
- 2003年照明学会九州支部優秀施設賞【OMI サロン】
- 第18回日経ニューオフィス賞
九州ニューオフィス奨励賞【（株）西鉄エージェンシー】
- ‘01より九州産業大学建築学科のインテリアデザイン非常勤講師

《講義》

1. 一番食品おいしさ提案室 With one

今までは企業にだけ販売をしていたインスタントラーメンなどのスープを作る会社が、一般の家庭向けにレトルトの食品（スープ・ドレッシング）を商品開発するため企画した建物である。

もっとお客様に近い場所で、直接声を聞けるようなお店（アンテナショップ）にしたいという思いが込められている。

この一番食品は路面店で、間口は狭いが奥行きはある。入ってすぐお試しコーナーがあ





り、ここではスープ・サラダ・パンのセットで、好きなドレッシングを味わってもらおう。これもまた、身近にお客様の声を聞くための方法である。

物販棚は飾りながら売ることとし、御進物用のパッケージも展示している。

今宮さんにこの棚についての印象を尋ねられ返した答えは「売り物みたいに見えない。」だった。これは、今宮さんが一番食品をデザインする上で、最も重要としてい

た「家庭の食器棚、朝食」が表現できているということだと思う。さわやかな朝、お店らしくない家庭的な雰囲気を出したかったという今宮さんのプランニングは大成功だと感じた。

2. ローゼンタール

長崎県にある路面店のイタリアンレストランで建物の一階にあり、二階は美容院となっている。オーナーさんはいろいろな仕事を行っているのだが、飲食店は初めてとのことで、プランニングをする上、まず考えたことは「オーナーさんがいつまでこのお店を続けられるか？」ということだったという。試行錯誤もあるのではないかと考え、店内をいくつかのシーンに分けている。



閉められる BOX 席、割りとフリーなスペースのカウンター・オープンダイニングによりゾーニングされている。



昼間で店内全体のオープンが難しいような場合にはオープンダイニングだけで営業出来るプランになっている。その際、空いている場所は物販、もしくは誰かに貸すなどして、共同して経営出来るようにと、いろいろな展開に対応できる形になっている。

また、これらのスペースを仕切るのは食器棚で、壁よりも圧迫感を感じないことを意としている。

平行に川の字型で並んでいるバックカウンター・食器棚などの家具は、高さ・材料・色を同じにすることにより統一感を出している。これだけでインテリアと呼べる。内装にはほとんど経費をかけず、ペンキ塗りし、ペンライトを下げただけとなっている。梁による天井の高さを利用し、ホールと奥の BOX 席との差をつけ、奥まった感じにより落ち着いた雰囲気を出している。

3. KINOMA

二日市にある新築のレストランである。このような新築の場合、建築家と仕事する機会が多いが、今宮さんはもともと設計事務所のインテリア室にいたこともあり、建築家と一緒に仕事することが好きだとおっしゃっていた。最初から店舗設計事務所に行くと、建築家と組んで一緒に仕事をするのは戸惑いがある人が多いとのことだった。

このプランニングのテーマは、広い敷地の中で駐車場からお店まで歩いて来るまでのアプローチ・動線を、いかに楽しめるようにするかということである。入り口に行くまでのパーボラにはハーブなどの植栽を施し、美味しそうな物を食べさせてくれそうだなという気持ちを高めることとしている。入り口を入るとすぐパッサージュがあるが、これにより建物の中を街区に見立てている。



エントラストを入ると正面に山が見え、景色がいい。メインダイニングからは通路に椅子やテーブルなどが溢れ出しており、バンケットには貸しきって小さなコンサートや結婚式が出来るようになっている。

4. JR九州病院待合ホール



待合ホールに入ると、中央の柱に几帳台があり、ソファは並列に並んでいるが、この椅子だけでは人が座りきれないとのことで改善工事をおこなった。

このプランニングをする上で、今宮さんは「もともとの空間だけでは考えられない。」と思い、この空間を何とか広げられないかということと、待合ホールに用事がなく行き来するだけの人と用事のある人の動線をどのようにプランニングしていくかということに視点を置いている。

計画前の調査により、薬局は今の場所になくても大丈夫なことや、倉庫があることがわかり、まず倉庫の荷物をどけさせることを行った。これにより今までよりも広い空間が取られるようになった。

南側は、景色はよくないが光だけ差し込む窓をガラスブロックにした。また、柱を軸にプランを考えることとし、柱部分にみんなが見たい物（電報掲示板・テレビ）を置き、これを中心に椅子が配置されている。

また、椅子の延長戦上に動線を遮る几帳台を設けている。入り口の壁から少し椅子を出しているのは、外から見てここが待合ホールであると気がつかせてあげるためのサインである。

5. 大村第四校舎



とした空間になっている。

これは大村の校舎が足りなくなったため、駐車場だった所に実習室をつくったものである。今宮さんは、簡単な住宅なども設計されるそうで、この建物もトイレなしの教室、階段だけの単純な建物だったので、設計もされています。

校舎なので、長い休みには使っていない時間も多いため、外部に対しては閉鎖的なつくりになっている。逆に、内部は教室の窓を全開できるようになっていたり、外とのつながりをもたせ、広々

6. 大村美容専門学校 OMI サロン

ここは大名小学校前にあるテナントビルの2階の大村美容専門学校です。授業という形で実際に他のお客様に予約してもらい無料でシャンプー・カット・メイクをするスタジオでその設計をしている。学生が2人1組で組み、それに先生が5, 6人つく形で授業を行っており、お客様30人、生徒90人が一度に入れるようになっている。



メイクのところは、夜間メイク教室になり、壁の収納にはホワイトボードが入っている。

お客様をカットする際、利用する鏡は、両面鏡になっており、スライディングして、すべて収納することが出来る。この広いスペースを使って実際の美容アーティストに来てもらってデモンストレーションを見たり、ファッションショーの練習に使ったりも出来るようになっている。また、鏡の配列は、鏡を空間を交差させて、足元は前の人の足が見えるようになっている。なぜなら、全部鏡だとうっとうしく感じるため、必要な鏡だけでスッキリさせたかったからだ。そのため、鏡のフレームも白か鏡面にするかで迷った結果、白にしたという。

受付で考えた事は「90人の人が入った時、どれだけバタバタさせず清潔感をもたせるか」という事で、色は白に統一した。また鏡の美しさ、面白さを利用している。例えば、ガラスをすりガラスにした不透明な透明感を持ったフロストミラーを使用



したり、ショーボードという照明器具を鏡に写しこませて、連続間を強調している。天井は蛍光灯の光天井になっていて、顔に蛍光灯と白熱灯とを混ぜ合わせた自然に近い光を作り出している。

7. アルクデザインパートナーズ

黒川事務所の先輩3人で始めた建築事務所のオフィスのインテリアを担当している。これは貸しビルのため、内装や見物にあまり費用を加えられない代わりに自分たちの使用する物に費用をかけている。オフィスは1階、中2階、2階から構成されており、1階には受付カウンター、事務系コーナーがあり、壁はパネルを立てただけのシンプルなものにし、受付を印象的に作っている。間仕切りを移動させることが可能で、部



屋は会議室兼食事場となる。中2階には打ち合わせコーナー、応接室があり、ビームスのソファなどを置き自分たちが使うことにより、その良さをお客様にも伝えられたらという思いが込められている。2階は設計室、打ち合わせ室、資料代、個人用のデスクがある。

全体的には移動式の間仕切りを用いているためドアは全く無いといったオープンなスペースが特徴的なプランニングである。

質疑・応答

Q1. 受付は普通入口にあるものだけれど、大村美容専門学校は OMI サロンの受付はなぜ奥にあるのか？

A. ビジネスホテルのように入ってすぐに受付が待ち構えているのは威圧感がある。奥に受付を作ることにより店内を少し歩く時間が出来るとともに、店内がどのようになっているのかを見てもらう機会を与えることが出来る。また奥に書類関係があることや、2・3人のお客様が一度に来てもしっかりと対応出来るスペースが取れることも理由の1つである。何より“受付”というサインによる表示、人を言葉で動かすことはお客様に失礼なことである。奥に作ることで、店員がお客様を直接受付まで連れていくことが出来るというゾーニングが成されている。

Q2. なぜインテリアデザイナーという仕事を選んだか？やりがいいところはどこか？

A. 「喜んでもらえる」ということが一番。仕事はがっちり組んでするため、特に住宅のプランニングをする時は、事前に施主の家に通って、一緒に料理を作ったり、子供と遊んだりする。どんな台所で、どんな食器を使って、どうやって片付けをするのか、どこにお父さんは座っているのか・・・などを体験することが大切だと考えている。細かいことまで聞くために嫌がられることも多いが、ありのままの姿を見せってもらうことでプランニングをするのが最も良い。時には子供と一緒に模型作りをすることもある。家が出来た際、大変だったという人が多いが、その分面白いと言う人も多い。施主が自ら設計したかのように話しているのを聞くこと、そして同じクライアントからの依頼や紹介、世代に渡っての注文を受けることは嬉しいことである。

Q 3. 建築家と一緒に仕事をする際、境界線はどこにあるのか？

A. これは物件によって、また一緒に仕事をする相手によって毎回違うものである。建築家にどのタイミングでインテリアに入るのか？と尋ねられるが、インテリアデザイナーの意見が聞きたい時に呼んでもらえればいいと答えることが多い。建築家が目指している建築の奥行きを広げるため、インテリアデザイナー、照明デザイナー、サインデザイナーは建築家とコラボレーションするものだと思う。要するに、仕事は分担作業ではなく、「視点」の問題であり、専門家の立ち位置、スタンス、スケール間により変化するものである。最終的には建築家を中心に繋げていくのだが、すべての仕事は重なっていると思う。むしろ、重なっていないといい仕事は出来ない。誰しも、仕事を認め、尊敬することが必要なのである。

Q 4. インテリアの仕事は体力勝負!?

A. 集中して仕事をする事が多く、また外出時にかなり多くの資料やサンプルを持って行くため、体力は要る！また、現場は歩くし、立ったまま何時間もいるため、あまりきれいな仕事とは言えない・・・。

Q 5. 色はどのようにして選択しているのか？

A. 色彩感覚に関しては、素材の持つ色を重視している。色は組み合わせで変化したり、他の色と影響しあって変化したりする。実際に使用すると陰影が出てくるし、仕上げ方によって表情やマテリアルも変わるものである。OMIでは店外を敢えて白くしているが、それは汚れを目立たせ、常にきれいにすることを目的としている。美容院で白を使うことはタブーであるかの様に思われるが、逆に清潔感を保つための方法になるという発想である。

Q 6. 黒川紀章氏の事務所にどのように就職したのですか？

A. 初めは設計事務所に入ろうなんて思っていなかった。卒業計画の際に、3世代に渡って住んでいる家を岩手県で見つけ、1ヵ月半かけてそれぞれの世代の暮らしを調査したところ、その計画を事務所のインテリア室の部長が面白いと気に入ったため入社することとなる。何より、自分の計画に興味を持ってくれた人がいることが嬉しかったし、その人と共に仕事ができることが幸せだと思った。

Q 7. この仕事をしていて良かった、苦労したことは？

A. 施主に喜んでもらった時、プランを立てて上手くいった時は、「もしかしたら天才かも！」なんて感じてしまう。自分の中で方程式が解けると、とても達成感がある。どうやったら解けるのかは未だに分からないけれど、苦労したと思うのはそれ以外全部。(笑)無理難題にぶつかった時は辛い！でもやはり喜んでもらえるから頑張れると思う。